FRIENDS
WITHOUT A BORDER

Voice of friends

2018Annual Report
年次報告書

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

© Paul Wager

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの取り組み

私たちは、団体創設以来、医療を受けることが困難なアジアの子供たちのために活動しています。子供たちとその家族が安心して健康を託せるよう、カンボジアとラオスに、非営利の小児病院を設立しました。
活動の柱となるのは、【医療・教育・予防】です。
目標は、10年後、現地スタッフの手で、質の高い心のこもった医療を提供できるようになること。その要となるのが、現地スタッフを雇用し、専門家による人材育成に力を注ぐことです。インターナショナルスタンダードの医療提供を目指すため、院内公用語を英語とし、語学教育も合わせて行っています。国の小児医療をリードする病院に育てた上で現地化する、というのが、私たちのプロジェクトモデルです。

私たちの根幹となる思いであり、スタッフひとりひとりが常に心に刻んでいるのは、

Compassionate care

という言葉です。これは、
すべてのことに思いやりの心を持って対応する
という意味で、病院では、どんな患者さんに対してでも、
我が子を思うのと同じような気持ちで接し
ケアをしています。また、たとえ医療現場でなくとも、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーに関わるすべての活動・行動は、『Compassionate care』を信条として取り組まれています。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーは、医療とは無縁だった一人の日本人カメラマン＝井津建郎が、カンボジアで偶然出会った親子をきっかけとして誕生しました。

1993年、撮影のためカンボジアを訪れていた井津は、瀕死の子を抱きながらも、お金がないために病院で受診することができない父親に出会います。なす術もなく、その子供は井津の目前で息を引き取ったそうです。
「自分はアンコール遺跡で “Take（撮る・もらう）” ばかりだったが、“Give（返す・与える）” もするべきではないか」そう考えた井津は、非営利の小児病院を設立しようと決意しました。こうして設立されたのが、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー（＝国境なき友人）です。

最初のプロジェクトとして、1999年2月、カンボジアにアンコール小児病院を開院。設立時の「いずれはカンボジア人が自分たちの手で病院を運営できるようにしよう」という目標は、2013年に達成されました。この経験を活かし、次のプロジェクトとしてラオスでの小児医療支援に着手し、2015年2月、ラオ・フレンズ小児病院を開院しました。

井津建郎がカンボジアでの小児病院設立を決意

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN設立

アンコール小児病院がカンボジア保健省より教育病院に認定される

ラオスのルアンパバーンにラオ・フレンズ小児病院を開院

1993 ● 1996 ● 1999 ● 2005 ● 2010 ● 2013 ● 2015 ● 2018

カンボジアのシェムリアップにアンコール小児病院を開院

カンボジアのソトニコム郡立病院内にアンコール小児病院サテライトクリニック（分院）を開院

ミャンマーでの栄養教育支援を開始

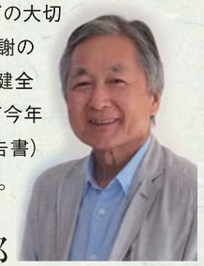
アンコール小児病院を現地化し、カンボジア人による運営が始まる

ラオ・フレンズ小児病院新生児室の拡張工事に着手・完成

FRIENDS WITHOUT A BORDER

国境なき友人の皆様へ

Compassionate care（思いやりあるケア）はカンボジアの聖地・アンコールワット近くに20年前に開院した小さなアンコール小児病院開院初日からのフレンズの大切な理念でした。そのアンコール小児病院は今年開院20周年を祝い、今や毎日平均500人の子供たちの診療のみならず、カンボジア有数の小児医療教育病院として重要な役目を果たすまでに成長しました。これも20年にわたってご支援を賜った皆様方とご協力いただいた医療ボランティアの方々のおかげで、私たちの当初のささやかな夢が今日の大きな現実として実るまでに至りました。アンコール小児病院が自立を果たした現在、フレンズはカンボジア・アンコール小児病院の経験をラオスの環境に生かすべく、カンボジアでも効果的であった医療・教育・予防の3本の柱をラオ・フレンズ小児病院の基盤として2015年に開院したラオ・フレンズ小児病院の運営に生かしています。世界各地からの医療ボランティアと病院常駐教育ディレクターとの連携によって、ラオス人スタッフの医療・看護レベルを向上させることが、将来のラオスのみならず東南アジアの医療レベル向上に貢献できると考えています。私は年に数回ラオ・フレンズ小児病院を視察していますが、その度に大きく向上しているケアのレベルに驚かされています。昨年末に新設された新生児ケアの部屋で、看護師が新生児を抱く時の眼差しの優しさ、この赤ちゃんは新生児ケア室が開かれる前だと生きてはいなかったことが痛感されます。経験豊かな医師が怪我や病気の子供たちの痛みを緩和している現場を見て、そして栄養障害で訪れた子供を栄養学ユニットにおいて適切に治療した結果、逞しくなった子供を見る母親の喜びに満ちた笑顔を見る時の喜び。
ラオ・フレンズ小児病院では全てのスタッフが患者をあたかも我が子のように親身にしかも無料で診療しています。貧困家庭が非常に多いラオスではラオ・フレンズ小児病院は彼ら、彼女らにとっての大切な拠り所なのです。これも支援者の皆さまなしでは実現できませんでした。
これら皆様からいただく貴重なご支援がラオスの子供たちと家族にとっては、生死にかかわるほどの大切なことだということをお知らせして感謝の言葉とさせていただきます。団体の健全な運営のための情報公開の場として今年度よりアニュアルレポート（年次報告書）を制作いたしました。ご参照ください。



井津建郎
フレンズ・ウイズアウト・ア・ボーダー創設者

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがカンボジアのシェムリアップにアンコール小児病院（AHC）を開院して20周年を迎えました。2019年1月にはその20周年記念式典が開催され、私も参列しました。改めて20年前を振り返りその成長を実感しました。20年勤続スタッフが表彰され、ステージに上がる一人一人の20年前を思い浮かべました。「あー、この子は薬の計算ができない子だったな……」とか「病院のパーティの後、飲みすぎて二日酔いで仕事ができず帰した子だ」など、それぞれに思い出がいっぱいでした。小さなよちよち歩きの子供だったような感覚です。それが、今、病院の運営に頭を悩ませている成人となった姿を見ると、涙が止まりませんでした。20年前には、「きっと病院がカンボジア人だけで頑張れるには40年はかかるな」と思っていた自分が恥ずかしいほどです。
そして、アンコール小児病院の姉妹病院としてラオスに開院したラオ・フレンズ小児病院（LFHC）は、4周年を迎えました。スタッフ数も病院の規模も小さいですが、目指すゴールはAHCと同じ、ラオス人によるラオス人の病院を作ることです。まだやっとよちよちと2〜3歩、歩けるようになったばかりの病院ですが、AHCの後を追って頑張っているスタッフを見ると、とても楽しみになります。
団体のミッションである「Compassionate care」は、AHC開院当初から、またLFHCでも日々伝えてきたことですが、それがどれくらい根付いているのかは秤で測ることもできないし、色が変わるものでもありません。しかし、日常のいろんな場面で、「お！変わったな」と気づかされることが突然あったりします。現場にいる役得だとほくそ笑んでしまいますが、そんな機会が日に日に増えていくことが、私の大きな楽しみでもあります。このアニュアルレポートは、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANとしては創刊号となります。
「お！」という場面をはじめ、これからのLFHCの成長を、このレポートを通じて皆さんとシェアできたらよいなと思っております。
引き続き、フレンズの活動をご支援いただけますようよろしくお願いいたします。

赤尾和美
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 代表

乳幼児から15歳までの子供たちを対象に、24時間態勢の救急病院として診療を行っています。

医療

ラオス

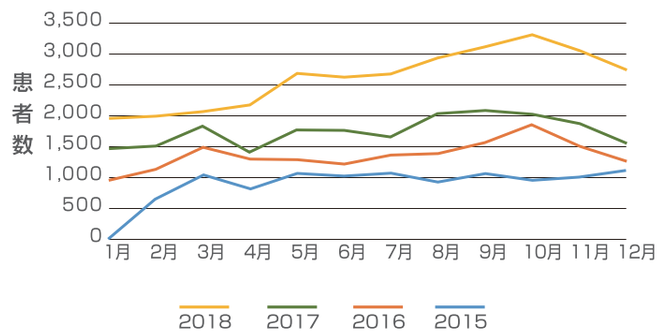
TREATMENT

ルアンパバーン県立病院の小児科業務がすべてラオ・フレンズ小児病院（LFHC）に移管されたことや（県立病院内の小児科は閉鎖）、地域におけるLFHCの認知度が高くなったことにより、2018年のLFHCは多忙を極めることになりました。増え続ける入院患者さんや新生児患者さんに対処すること、提供するすべての医療の質を上げていくことは容易ではありませんでしたが、最善をつくすことはできたと考えています。また、2017年に比べ、提供できる医療サービスも大幅に広がりました。その一部をご紹介します。

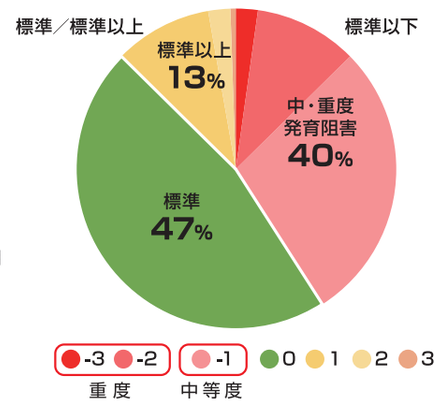
- 国際麻酔看護師協会より認定を受けた麻酔看護師が誕生し、麻酔を伴う医療行為の質を高めることにつながりました。
- 栄養失調の子供に定期的に栄養食を提供できるよう、栄養治療食3トン分を準備しました。
- 口唇口蓋裂手術プログラムを継続して行い、24人の子供たちに手術を行うことができました。
- 奇形・拘縮症状の子供たちへの手術に向け、取り組みを始めました。
- 新しい血液検査機器を購入し、検査の幅が広がりました。
- ソーシャルワーカーを雇用し、患者さんやその家族へのサポートをよりきめ細かく行うようになりました。
- 隣接するルアンパバーン県立病院との連携をより強化し、検査結果や画像データ等を共有できるシステムも導入しました。
- 新生児室の増改築、専門外来を開設しました。詳細は次ページをご参照ください。
- 前年と比較した患者さんの増加率は以下の通りです。

外来患者総数：40%増加（15,648人→21,984人）
入院患者数：10%増加（2,108人→2,304人）
新生児患者数：16%増加（393人→457人）
救急患者数：240%増加（2,811人→6,677人）
手術件数：30%増加（595件→779件）

ラオ・フレンズ小児病院　来院患者統計



身長に対する標準体重（Z-スコア）



医 療

ラオス

TREATMENT

新生児室 リニューアルオープン

2016年10月に新生児室を設けて以来、新生児室は常に高い稼働率が続いています。抵抗力が弱い新生児には特別なケアが求められる上、母親の授乳にも配慮しなければならないため、新生児室の拡張が必要であることは明らかでした。関係各所とも協議した結果、隣接するルアンパバーン県立病院内の元小児科病棟をLFHCの新生児室としてリノベーションすることが決定。配線や配管を一新し非常用発電機も完備した、新しい新生児室がオープンしました。

新しくなった新生児室は、以前の6倍ほどの広さに20床が置かれ、授乳室も完備。赤ちゃんとお母さんが安心して過ごせるように設計されました。新生児室の拡張に当たっては、医師や看護師の数を増やし、業務が滞らないよう考慮して配属しました。また、担当医師はルアンパバーン県立病院での難しいお産や帝王切開にも立ち会い、そのまま小児科管轄の医療に取り組むことが可能に。より効率的で手厚い治療ができるようになりました。

専門外来 サラセミアクリニック

サラセミアは先天性の血液疾患で、重度の貧血と、そこからくる肝脾腫、発育遅延などが現れる病気です。地中海地方に頻発したため、地中海貧血とも呼ばれています。日本では稀な病気であると言われ、難病指定もされていますが、東南アジア地域では珍しい病気ではありません。サラセミア疾患患者であった場合、一生、輸血を余儀なくされ、しかも、治療のための輸血で鉄過敏症を併発し、心臓や肝臓の機能低下を招く事態に陥る危険性もはらんでいます。

LFHCでは、疾患を発見し、継続的に治療を行うためのサラセミアクリニックを2017年にオープン。あっという間に患者数は200人を超え、クリニックの実施日を週1日から週2日に増やすこととなりました。また場所も、新しくできた新生児室に移すことに。新生児室のリノベーション時、サラセミアクリニックのためのスペースも確保しました。

専門外来 障がい児クリニック

ラオスでは、障がいがあるからといって、病院に通ったり、リハビリを受けたりすることが一般的ではありません。障がいに対する国の対策がなく、知識を得る機会もないので、たとえ子供に障がいがあっても、多くの人々は何もわからないまま、何の手段も取ることができないのです。また、熱や下痢などの病的症状があって病院を訪れた際に、障がいが判明する場合もありますが、ラオスの医療機関の多くは、障がいを評価したり、それ相応の対処をしたりすることができません。

こうした状況を改善するために、LFHCでは2017年8月から週1回のペースで、障がい児クリニックを行っています。医師・看護師・栄養士・理学療法士・作業療法士・チャイルドライフセラピスト（遊びの専門家）・訪問看護スタッフなどでチームを組み、患者さんの症状評価とケア、家族への教育などを多角的にアプローチ。2018年は、300を超える評価とセラピーセッションを行いました。

院内スタッフはもちろん、国内の医療従事者にも研修やトレーニングを実施し、国全体の医療レベル向上に貢献しています。

EDUCATION

教育

ラオス

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーは、医療を提供するだけではなく、優秀な医療者を育成することにも力を注いでいます。教育の対象となるのは、LFHCのスタッフはもちろん、ラオス国内の医療従事者全般です。専門分野の強化、国内外で行われるシンポジウムへの参加、海外からの医師や看護師、薬剤師、放射線技師によるトレーニングなど、多くの教育プログラムが実施されました。

- HIV抗体検査のためのカウンセラー養成トレーニングを実施し、修了したスタッフをHIVカウンセラーに認定しました。
- 医療スタッフと事務スタッフに対し、リーダーシップ研修を行いました。
- 首都・ビエンチャンで行われたいくつかの学会に医師3名が参加し、そのうちのひとつでは、小児救急についての発表も行いました。
- タイのバンコクで開催された新生児治療に関する国際ミーティングに、医師2名と看護師2名が参加しました。
- アメリカのボストン小児病院にて、2名の医師が臨床見学プログラムを修了しました。
- 新生児病棟担当の医師と看護師に向け、ハイリスク出産時の新生児蘇生プログラム研修を行いました。
- WHOの救急トリアージおよび搬送コース研修を実施し、28名が参加しました。
- 解剖学、生理学、サラセミアに関する講義を、40名以上の看護師が受講しました。
- 国内の医療助手学生98名に対し、LFHCが理論学習と実習研修を行いました。
- 国内他病院の医療助手2名、看護師2名をLFHCで受け入れ、1ヶ月間の臨床実習を行いました。
- LFHCの全ラオス人スタッフに対し、能力別英語クラスを実施しました。

【ラオス北部地域における小児栄養失調に対するケアの改善プロジェクト】開始

ラオスでは、5歳未満の子供の44%（LFHCがある北部地域に限定した場合は60%）が発育不良とされています。季節的な食糧不足、自然災害、乳幼児の摂食習慣の乏しさ、単調な食事習慣などが、その主な理由と言えましょう。こうした状況を打開するため、LFHCでは【ラオス北部地域における小児栄養失調に対するケアの改善プロジェクト】を計画、公益財団法人日本国際協力財団の「2018年度国際協力NPO助成」に採択され、プロジェクトを開始しました。

このプロジェクトは、栄養失調の子供たちに最適なケアを提供するためのプログラムを開発し、ラオスの医師・看護師・栄養士に専門的な研修を施すことで、小児栄養失調ケアの質の向上を目指すものです。

LFHCがラオスにおける栄養失調ケアのモデルケースになるよう、2019年も引き続き、ラオス政府との協力体制を強めながら推進していきます。

保健・衛生観念が浸透していない農村部に出向いて病気予防活動を指導するとともに、経過観察が必要な慢性疾患患者を継続的にケアしています。

Photo by JUNJI NAITO

予防

ラオス

アウトリーチプログラムの主な活動は、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やかに過ごせるようなフォローアップを行うことです。

LFHCに来る患者さんは経済的にも社会的にも問題を抱えていることが多く、それにより子供の健康や成育に問題を及ぼすケースが少なくありません。院内ではとかく疾患ばかりに目が行きがちですが、問題はそれだけではないのです。しっかりとカウンセリングを行い、健康に害を与えるような環境や生活習慣、経済状態などを評価し、退院後の問題発生を予測して介入します。そこまでしなければ、せっかく良くなった病気がすぐにまたぶり返すことにもなりかねないからです。退院後も経過観察が必要と判断された患者さんとその家族に対しては、フォローアップとして訪問看護を行っています。

また、アウトリーチスタッフがHIV抗体検査カウンセラーでもあることから、HIV感染症の子供とその家族をささえるのも大きな役割の一つです。隣接する県立病院のHIVクリニックと連携し、適切な診療やサポートが受けられるように計らいます。継続的な治療に加え精神面でのサポートも必要なため、やはり訪問看護の対象となります。

訪問看護で患者さん宅を訪れることは、その地域全体＝村ぐるみで病気予防に取り組むことへの第一歩にもなり、非常に重要な任務を孕んでいると言えましょう。アウトリーチチームが目指すのは、ホリスティック（全人的）アプローチです。病気のみを治療するのではなく、患者さんを取り巻く様々な問題に目を向け、子供たちが心身ともに健やかでいられる環境を作ることこそが最終ゴールと考えています。

- 年間訪問件数：446件
  1年間の総走行距離：33,253km
- 栄養失調、脳性麻痺、HIV感染症、新生児時に治療を受けた子供のフォローアップを行うため、また、社会的な問題を抱えた退院家族をサポートするための訪問看護を行いました。
- 病気や治療に関わる患者家族の不安を解消し、患者家族の様々な相談事に対応する必要が高まったため、ソーシャルワーカーを1名雇用しました。
- アンコール小児病院より看護師兼ソーシャルワーカーのスタッフを招聘し、アウトリーチスタッフ全員に2週間の研修を実施しました。
- 栄養管理チームとの共同プロジェクトとして、村に出向き、母親と子供に向けた栄養教育を行いました。

Aちゃんの症例

Aちゃんは、胎児性アルコール症候群の疑いと早期出産低体重児の診断で入院し、2か月をLFHCで過ごしました。胎児性アルコール症候群はお母さんの飲酒が原因です。そのため、退院前にAちゃん宅を事前訪問し、家庭環境を評価することにしました。

Aちゃん一家は住居を転々とするその日暮らしで、3人のお姉ちゃんとお兄ちゃんは誰も学校に通っていません。両親は喧嘩が絶えず、酒浸りで、お酒がなくなると、その時ばかりは酒代欲しさに仕事に出かけるような日常です。家は1年の期限付きで借りている小さな小屋。水も電気もなく、壁や床は部分的に欠損し、家の外も中もゴミや物が散乱しているような状態でした。やるべきことが山積みの状況下、村長さん、ご近所さん、学校、政府機関や他のNGOなど、環境改善のために協力を得られそうな人たちを整理してタッグを組み、アウトリーチチームは継続して訪問を続けています。Aちゃんのように小さな赤ちゃんは病気にかかりやすい上、胎児性アルコール症候群から併発しやすい障害にも注意を払わねばなりません。関わってすぐに全ての状況が改善されるわけではありませんが、少しずつ前進するように取り組んでいます。現在、Aちゃんの健康に大きな問題はなく、兄姉は学校に通えるようになりました。

ACTIVITY

ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の1年

活動ハイライト

開院3周年式典

開院3周年イベントでお医者さんごっこをする子供たち

口唇口蓋裂の手術を実施

ラオス保健省大臣がLFHCを視察

新たにソーシャルワーカーを雇用

ラオス国内でダム決壊事故が発生し、院内でも支援物資を集める

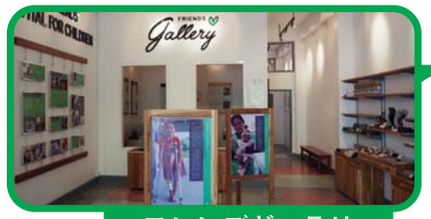
リーダーシップ研修を終えて組織を強化

英国王室のベアトリス王女がLFHC来訪

ルアンパバーン・ハーフマラソン開催

新生児室リニューアルオープン

ルアンパバーン・ガラ開催



フレンズギャラリーリニューアルオープン

SUPPORT

アンコール小児病院への支援

カンボジア

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーが設立・運営していたアンコール小児病院(AHC)は、当初の予定通り現地化を果たし、2013年1月からはカンボジア人の手で運営されています。フレンズJAPANは、その後もAHCの教育プロジェクトに支援を継続。カンボジアの教育病院として認定されているAHCでは、国内の各教育機関や保健施設と連携を深めながら、様々な教育活動に取り組んでいます。

- 院内スタッフに対し、継続的な医療教育やワークショップ、トレーニングコースを実施しました。
- タイ、シンガポール、イギリス、インドネシア、中国で行われた国際会議に、のべ17名のスタッフが参加しました。
- 国内の医療関連会議に、のべ43名のスタッフが参加しました。
- 国内の大学や看護学校で学ぶ医療系学生、他病院の医療スタッフに対し、包括的な医療研修を実施しました。
- のべ950名の医学生と看護学生をインターンとして受け入れました。
- 薬剤師・助産師・理学療法士・ソーシャルワーカーおよび政府の医療関連従事者に対し、新生児ケアの研修を実施しました。
- AHC主催の【第2回子供健康管理会議】を開催し、国内各地から、政府関係者やNGO団体の医療専門家260名以上が集いました。国内医療者の情報共有の場となっている本会議は、来年以降も開催する計画を立てています。
- 医療(Treatment)教育(Education)予防(Prevention)の活動用トラック=通称TEPトラックが、小学校25校を訪問し、健康教育を実施しました。

- 小学校64校で、6,834名の小学生に保健衛生教育を実施しました。

外来患者総数	117,232人
入院患者数	3,189人
救急外来患者数	15,961人
集中治療室患者数	991人
眼科患者数	14,850人
歯科患者数	42,631人

SUPPORT

現地NGO・ゴールドミャンマーへの支援

ミャンマー

ゴールドミャンマーは、ミャンマー国内で衛生教育やモバイルクリニック(移動診療)に取り組んでいる現地のNGO団体です。フレンズJAPANはゴールドミャンマーを支援し、農村部での病気予防活動などを共同で行っています。これまでに、母親への栄養・衛生指導、子供たちの健康診断、母親へのトレーナー研修などを実施。特にトレーナー研修を行ったことによる効果は大きく、トレーナーになった母親たちによる栄養講習会は毎回大盛況で、栄養に関する知識を地域に広めることができました。2018年は、これまでに実施したプロジェクトの総括と、地域のニーズ調査を行いました。

赤尾和美 Kazumi Akao 看護師の 今月の出来事から

ラオ・フレンズ小児病院

1月▶4月

院外で行われたラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の栄養士による村人たちへの教育。教育に関わっているのは医師や看護師のみではないんですよ。この日は、他団体と協力しての開催で、内容は盛りだくさんでした。まずは、授乳中のお母さんの栄養のお話を題材にした寸劇で、みんな大笑いでリラックス。ラオスでは、民族によっては出産後に食べてはいけないものがあり、その結果おっぱいの栄養も不足して、命に関わるようなビタミンB1不足を引き起こしてしまうことがあるのです。知識を習った後には実践です。バランスのとれた食材を使って、離乳食にもなるおじやを作りました。火を起こすところから始めて、材料をみんなで準備。ぐつぐつ〜っと約1時間煮込み、できたてのアツアツを試食です。気温が低く寒かったので、おいしさが倍増でした。栄養のあるご飯が簡単に作れることがわかって、たくさん集まってくれたお母さんたちも嬉しそう。今後は、町から離れた村でも開催していきたいですね。

5月▶6月

今回で19年目のヘアーボランティアさんが、今年もお越しくださいました！毎年7〜8名のグループでアウトリーチチームと共に村へ行き、子供たちの髪の毛を切りまくります。普段はエアコンが効いた素敵なサロンで髪の毛のケアをしている皆さんですが、村では場所を選ぶわけにはいきません。学校の軒下や集会所に長椅子を並べてチョキチョキ！どこでもチョキチョキ！汗だくになって、数百人の子供たちと先生やご父兄の皆さんをさっぱりきれいにしました。最初はみんな「切らない」とか「見に来ただけ」とか言っているのですが、一人が素敵に仕上がるのを見ると、いきなり長蛇の列！ふふふ。かわいいです。19年のお付き合いともなると、老後の話やら年金の話やら、年を積み重ねたなぁという味のある会話が増えてきました。『これからも一生のお付き合いになること間違いなし！』と改めて思いました。来年も再来年も、ずーっと、よろしくお願いいたしますね！

7月▶8月

Aちゃんは生後2か月の赤ちゃん。7月から入院しています。今、事情があってご家族と一緒に過ごせません。病院の中ではみんながお母さん。大きくなった時にどれだけ“お母さん”から愛情を受けたのかをストーリーにして残しておきましょうと、チャイルドライフセラピストがこんな素敵なメモリーブックを作成しました。抜粋してそのストーリーをお裾分けします。ジーンとしちゃいます。Aちゃんが大きくなった時に、LFHCで愛情たっぷりの時間を過ごすことができたことを実感してくれるといいですね。こんな素敵なスタッフがいることがとっても自慢です。

チャイルドライフセラピストのコクメング（右）とエリース（左）

このマスクであなたの安眠確保に努めました！

チャイルドライフセラピストのコクメングは、あなたを抱っこして、お話をして、健康で強い子に育つように……といつも祈っていました。

あなたは抱っこが大好きでした。そして、とってもたくさんの人たちにいっぱい愛されていました。

最初はとっても小さくて力が弱かったので、鼻からのチューブでミルクを入れていましたが、すぐにおっぱいを吸うことを覚えてくれました。

9月▶10月

以前、新生児室の改築工事がスタートしたことをお伝えしましたが、急ピッチで工事が進められ、10月19日にオープニングを迎えることができました。オープニングの日には、イギリスから、エリザベス2世女王のお孫さんベアトリス・オブ・ヨーク王女がご来院くださり、記念すべき日となりました。旧新生児室に入り切れず、あちらこちらに分散して寝ていた赤ちゃんが新病室に移り、新しい新生児室の20床はオープン当日から満床に。広々とした場所で診療できるようになり、スタッフも効率よく動けるようになりました。LFHCの古い新生児室がオープンしたのは2016年10月です。空床があったのは最初の数か月のみで、その後は常に100％以上の稼働率となっていました。新生児室に来る赤ちゃんは、予定より早く産まれてしまった子がほとんどです。外界に適応するには各臓器が未熟なので、適切な環境が必要になります。しかし、古い病棟では、狭い部屋にぎゅうぎゅうに詰めてベッドを置き、お母さんたちがゆったり座るスペースさえもない有り様で、適切な診療ケアを提供できているとは言えない状態でした。新しい新生児室が必要なことは明らかで、院内外でディスカッションと交渉を進めた結果、隣接するルアンパバーン県立病院内に場所を確保。8月から工事に着手し、約2ヶ月でオープンにこぎつけました。完成を待ちわびていたスタッフや赤ちゃんのご家族、とても嬉しそうです！初日から全20床すべて埋まったことが、需要の高さを物語っています。

11月▶12月

病院のイメージはどうしてもネガティブになりやすいですね。そこで、楽しいことをいっぱい企画して、スタッフにも子供にも笑顔をと、いつも試行錯誤しています。12月はクリスマス。仏教の国ですから本来のクリスマスイベントとは違いますが、1日だけ、クリスマスを楽しいことに拝借です。

LFHCのマスコット、ジャイディがサンタさんになって、院内の子供たちへ文房具のプレゼントを配りました。楽しいことにはスタッフも便乗！ジャイディがいつもいい仕事をしてくれますね！

フレンズJAPANの活動

ラオスフェスティバル 2018

代々木公園（東京）

2018.5.26（土）～27（日）

ラオスにゆかりのある団体や企業、学校、大使館関係者などが集って催されるフェスティバルに、フレンズもブースを出展しました。飲食コーナーからのエスニックな香りに包まれつつ、フレンズブースではラオ・フレンズ小児病院（LFHC）のマスコット・ジャイディのパネルが立ち寄ってくださる皆さんを出迎え、スタッフとボランティアさんが現地での活動を紹介。東南アジアの医療に興味のある方、ラオスへの旅行ですっかりはまってしまった方、ビジネスでラオスに進出したいと考えている方、ラオスからの留学生、毎年立ち寄ってくれる常連さん、たまたま公園に遊びに来たというラオス初心者の方、等々、たくさんの方とお話する機会を得ることができました。来賓として来日されたラオス政府の方から募金をいただいたのも、嬉しい出来事でした。

クラウドファンディングにチャレンジ

2018.4月～6月

クラウドファンディングは、インターネットを通して夢や目標を発信し、その実現に向けて、共感してくれた人たちから広く資金を募るという資金調達方法です。「この夢の実現には○○円必要です。一緒に夢をかなえてください！」と訴え、支援希望が目標額を超えると、集まった資金を得ることができます。ただし、Readyforの場合は、目標金額に届かないと1円も手にすることはできません。

Readyforはクラウドファンディングの運営会社のひとつで、フレンズのチャレンジは3回目となります。今回のチャレンジは【ラオスの障がいがある子供たちをキラキラの笑顔にしたい！目標金額300万円】。181名の方々から総額4,012,000円の資金応援をいただき、無事に目標を達成することができました。

たくさんの激励と資金応援を、どうもありがとうございました。

ラオス スタディツアー

2018.8.20（月）～25（土）

LFHCの院内見学がコースに入った特別スタディツアーが催行されました。LFHCでは普段、プライバシー確保と感染予防の観点から部外者の立ち入りをお断りしていますので、本当に特別なツアーといえます。このツアーには13名が参加。院内見学のほか、希望者は赤尾看護師（フレンズJAPAN代表・LFHC勤務）との訪問看護にも同行したり、世界遺産の街や有名観光地を訪れたり、とても充実したツアー内容でした。ご参加いただいた方々から大変ご好評いただきましたので、ぜひまた、企画したいと思っています。ご期待ください。

東京チャリティ・ガラディナー 2018

ザ・キャピトルホテル東急（東京）

2018.10.12（金）

活動を多くの方に知っていただき、ご理解とご支援を求めるために、フレンズでは様々な方法で広報活動を行っています。このディナーパーティー形式のイベントも、そのひとつ。今回で3回目の開催となり、211名にご参加いただきました。このイベントの目玉となるのが、チャリティオークションです。ラオスツアーに国内ツアー、ホテル宿泊付き観劇チケット、高級エステや希少なワインなど、入手困難な逸品の数々を競り落としていただき、その売り上げが病院の活動資金となります。また、希望者全員が支援可能な【Fund A Lifeline 命をつなぐ力＝ラオスの新生児支援】には、約100名の方に挙手していただきました。2019年10月にも同イベントを予定していますので、ぜひ、ご友人とお誘い合わせの上、ご参加ください。もちろん、お一人でも大歓迎です。

Act Against AIDS 2018「THE VARIETY26」

日本武道館（東京）

2018.12.1（土）

12月1日の世界エイズデーに合わせて、日本各地でエイズ啓発活動を行っているAct Against AIDSの武道館イベント【Act Against AIDS 2018「THE VARIETY26」】が開催されました。俳優の岸谷五朗さん、寺脇康文さん、三浦春馬さんらが中心となり、今回で26回を数える毎年恒例のチャリティコンサートです。毎年、趣向を凝らして開催されていますが、今回は、出演者が全員、俳優。豪華な面々による特別なステージは圧巻でした。テレビ、新聞などたくさんのメディアにも取り上げられていますので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。このチャリティコンサートの収益金をフレンズにご寄付いただいています。コンサート中に支援先であるフレンズを紹介するコーナーもあり、11月に現地視察のためLFHCを訪問した岸谷五朗さんより報告がありました。主催者、出演者、参加者、関わっていただいたすべての皆さまに感謝いたします。

事務局活動

2月
活動報告会開催

3月
赤尾和美
「平成 29 年度大山激励賞」受賞

4月
Readyfor を通じて
クラウドファンディングに挑戦

5月
ラオスフェスティバル出展

6月
第 29 回日本小児科医会総会
フォーラムで赤尾和美が講演
活動報告会開催

8月
活動報告会開催
ラオススタディツアー催行

10月
東京チャリティ・ガラディナー開催
第 51 回看護学生看護研究学会
で赤尾和美が講演

12月
活動報告会開催

How to Support

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

◉正会員
年会費　個人12,000円
　　団体・法人30,000円
（年度ごとに更新・活動への議決権あり・入会申込書あり）

◉賛助会員
年会費6,000円（支払日より1年間）

◉学生賛助会員
年会費3,000円（支払日より1年間）

◉マンスリーサポーター
500円～可能
（毎月、指定口座より引き落とし）

◉一般寄付（金額・回数自由）

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

こんな支援方法もあります

◉寄付型自動販売機の設置
◉募金箱を設置
◉本やCD/DVD（新品・中古不問）を「ありがとうブック」に送付
◉グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

皆さまの支援でこんなことができます

◉500円で、医師や看護師用の使い捨て手術着を1着購入することができます。
◉1,000円で、粉ミルク2週間分を購入することができます。
◉3,000円で、一人の患者さんの首都ビエンチャンへの往復交通費を補うことができます。
◉5,000円で、一人の手術1回分の麻酔薬を購入することができます。
◉10,000円で、一人の患者さんの2日分の入院費を補うことができます。
◉30,000円で、院内薬局の運営費（薬代＋スタッフ人件費）1日分を補うことができます。

（1ドル＝120円の場合）

寄付型自動販売機の設置

自動販売機でドリンクを買うと、その代金の一部が自動的にフレンズへの寄付に充てられます。これは、コカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）が社会貢献活動として行っているもので、利益の一部が支援団体への寄付金となるシステムです。
この寄付型自動販売機を設置してくださるお店や会社を募集しています。

自動販売機設置によるご負担は、月1,500～2,000円程の電気代のみです。

募金箱の設置

フレンズの募金箱を置いてくださるお店や会社、施設などを募集中です。現在、47都道府県中24 都府県で、美容院やレストラン、パン屋さん、病院、企業の受付カウンターなど100カ所以上に設置されています。
イベントへの貸し出しも行っていますので、お気軽にお問い合わせください。
ご協力をお願いいたします。

ご支援方法についての詳細は、フレンズ事務局までお問い合わせください。

フレンズ関連書籍のご案内

※これらの書籍は現在、書店等での取り扱いはございません。
ご購入希望の方は、フレンズ事務局までお問い合わせください。

赤尾和美著
**「この小さな笑顔のために
～日本人ナースのカンボジア奮闘日記～」**
¥1,400（税別）

現在はラオ・フレンズ小児病院で活動する赤尾看護師が、アンコール小児病院時代に執筆した奮闘記。東南アジアにおける医療現場の臨場感だけでなく、カンボジアの人々の暮らしを眺めるような、紀行的味わいも感じることができる名著です。

宮本敬文写真集
「GIFT to Children of Angkor」
¥2,500（税別）

雑誌や広告写真で注目され多くの有名人を撮影して作品を残し、周囲に慕われながらも夭折した宮本氏。生前、アンコール小児病院の活動に共感し、何度もカンボジアに足を運んで撮影した渾身の写真集です。

世界子供白書 2017 より抜粋	日　本	ラオス	カンボジア	ミャンマー
新生児死亡率	1	29	16	25
5歳児未満死亡率	3	64	31	51
年齢に不相応な低体重の割合	2	6	10	7
改善された飲用水源を利用している割合	99	80	75	68
適切なトイレ設備を利用している割合	100	73	49	65
前期中等教育就学率	ー	56	46	52

※死亡率は出生 1,000 人あたりの死亡人数。その他項目の単位は%。

平成30年度　活動計算書

平成30年1月1日から　平成30年12月31日まで

特定非営利活動法人　フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取会費			
正会員受取会費	516,000	516,000	
2　受取寄付金			
受取寄付金	106,824,189	106,824,189	
3　助成金収入			
助成金収入	1,986,880	1,986,880	
4　事業収益			
普及活動収入	519,359		
収益事業収入	13,415,783	13,935,142	
5　その他収益			
受取　利息	1,788		
為替　差益	210,644		
雑　収　入	1,125		
そ　の　他	0	213,557	
経常収益　計			123,475,768
Ⅱ　経常費用			
1　事業費			
（人件費）			
給料　手当	4,629,713		
法定福利費	1,424,057		
人件費計	6,053,770		
（その他経費）			
アジアの恵まれない子供たちの医療支援を目的とする活動への助成事業	49,417,352		
<ラオ・フレンズ小児病院>の運営及び医療・教育事業	34,876,622		
アジアの恵まれない子供たちへの医師、看護師、その他のスタッフの派遣、教育事業	623,609		
地域医療支援事業	0		
適切な医療を受けることが困難な地域での保健ボランティアの育成、衛生予防指導事業	0		
機材・器具・薬品等の運搬事業	535		
エイズに関する普及啓発事業	0		
この法人の活動に関する普及啓発事業			
賃　借　料	1,592,500		
水道光熱費	137,820		
通信運搬費	334,736		
旅費交通費	502,655		
消耗品　費	139,896		
印刷製本費	482,810		
支払報酬	804,000		
研　修　費	152,232		
福利厚生費	209,595		
保　険　料	17,500		
諸　会　費	40,800		
会　議　費	13,240		
支払手数料	606,614		
雑　　費	53,915		
イベント経費	8,438,671		
為替差損	477,060		
【売上原価】			
期首棚卸高	514,679		
期首商品・製品棚卸高　計	514,679		
仕　入　高	△ 10,569		
当期仕入高　計	△ 10,569		
期末棚卸高	△ 464,655		
期末商品・製品棚卸高　計	△ 464,655		
売上原価　計	39,455		
その他経費計	98,961,617		
事業費　計		105,015,387	
2　管理費			
（人件費）			
給料　手当	1,536,534		
法定福利費	357,712		
人件費計	1,894,246		
（その他経費）			
賃　借　料	682,500		
水道光熱費	122,569		
通信運搬費	40,941		
旅費交通費	66,647		
消耗品　費	151,735		
研　修　費	10,000		
支払手数料	964,554		
支払報酬	518,400		
福利厚生費	173,928		
保　険　料	251,100		
会　議　費	2,561		
雑　　費	80,453		
イベント経費	216,543		
その他経費計	3,281,931		
管理費　計		5,176,177	
経常費用　計			110,191,564
当期経常増減額			13,284,204
Ⅲ　経常外収益			
経常外収益　計			0
Ⅳ　経常外費用			
経常外費用　計			0
税引前当期正味財産増減額			13,284,204
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			13,214,204
前期繰越正味財産額			10,700,410
次期繰越正味財産額			23,914,614

平成30年度役員

代　表

赤尾　和美（看護師）

副 代 表

井津　建郎（写真家）

理　事

戴　波留美

高橋　大輔

（三光ソフランホールディングス（株）取締役
メディカルホットライン（株）代表取締役）

竹地　春海（中山身語正宗大本山瀧光徳寺）

中小路　太志

堀　成美

（国立国際医療研究センター
国際感染症対策室感染症対策専門職）

松島　彰雄（前代表）

渡辺　淳子

監　事

熊井　昌広（会社執行役員）

平成30年度正会員

和泉　直子
一乗　朋美
大角　雄三
（株）岡興産
小川　直美
小川　弥生
小澤　誠
（医）誠歯会
加藤歯科クリニック
加藤　美里
兼子　思
小山　達雄
笹井　良太
関岡　俊二
（宗）泰宗寺
高橋　俊晴
猶原　祥光
（医）中野こどもクリニック
新見　香
則包　哲
萩生田　政由
橋本　朋子
橋本　真友子
平岩　町子
福祉研究会　MAHARO
藤井　立秀
藤井　哲夫
松島　彰雄
松原　めぐみ
真弓　バラカン
水谷　祐子
皆元　聡
（医）めときこどもクリニック
山田　秀一
渡邊　信子

東京チャリティ・ガラディナー2018
スポンサー

ADM

Hongene Biotech
NUCLEOSIDES & NUCLEOTIDES

Citrus Lee Restaurant

AMANEMU
AMANTAKA

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

（認定）特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町16-8 共同ビル7F
TEL/FAX:03-6661-7558　friends@fwab.jp　www.fwab.jp

Photo credits / AHC　Adri Berger　Karl Grobl.com　Shigemi Iyota　Yumiko Izu　Running Reel　Ellen Wallop